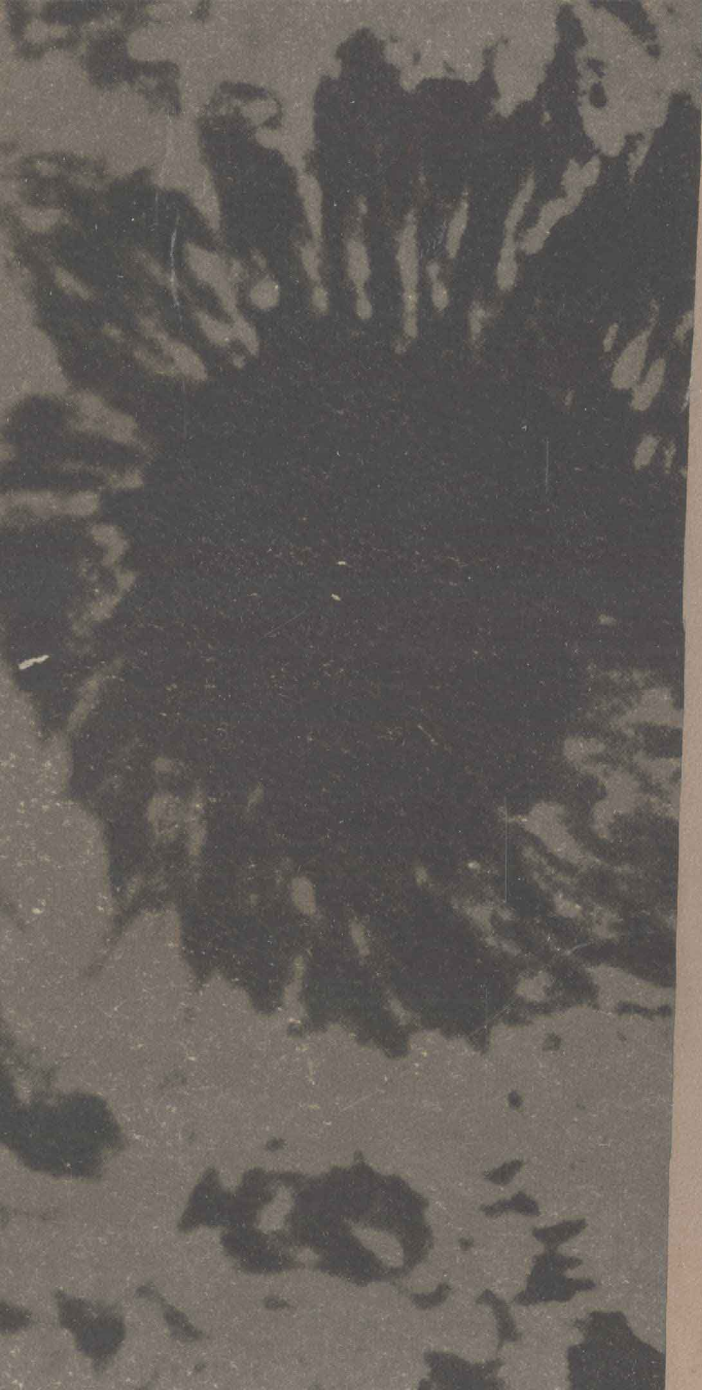




行為と死〇〇〇石原慎太郎

河出書房



行為と死

©1964

印刷

昭和三十九年五月十日

発行

昭和三十九年五月十五日

定価

二九〇円

著者

石原慎太郎

石原

装幀者

杉浦康平—カバー写真・畔田藤治

発行者

河出孝雄

発行所

株式会社河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三一八

電話東京二九一局三七二一 振替東京一〇八〇二

印刷

株式会社堀内印刷所

製本

株式会社中西製本

製本は入念に致しておりますが

万一、乱丁・落丁がございます時は

最寄りの書店 本社にてお取替えいたします

遠く背後で燃えているマナハ地区の建物の火を除けば、辺りに見える明りはなかった。

この町に戦闘が開始されて僅か数日ではあったが、革命後、子供までの市民がどんな訓練を重ねて来たとは言え、最も新しい兵器で重武装した敵軍が、孤立したこの町を陸海空の三方から押し包んでの攻撃の前には、すでに闘いの結着は眼に見えていた。

それでも全面降伏を呼びかける敵軍に従わず、未だにゲリラに姿を変えた戦闘が方々で行われている。

事実、首都カイロからとどいた通達は、全国民最後の一人まで銃を取って侵略と闘え、だった。

防戦した軍隊が潰滅して姿を消した後、なお執拗に市民の抵抗はつづいている。業を煮

やした相手の攻撃は段々に野蛮となり、戦闘員、市民の見境のない攻撃が繰り返され、最も執拗な抵抗をつづけるマナハ地区アバティストリートの住民に向って、抵抗を止めなければ人質の市民五人ずつを毎日犠牲として銃殺するという通告が、昨日英軍の手で行われ、実際にその処刑が行われていた。

しかし、今も見える通り、マナハの街に銃火は絶えることがなかった。マナハに限らず、海岸線から内陸へ、カイロを目ざして侵略しようとする英仏軍を食いとめるために、ポートサイド市の内外に、大小、さまざまな形で戦闘が続いている。

ポートサイドの中心部を占拠しながらも、それ以後の英仏軍の侵略の速度は、敵をその地に足止めしようとする市民の必死の反撃で、著しく落ちていた。

街路に灯りはなくとも、眼をこらせば澄んだ夜空の星明りで道筋をちがえることはなかった。

車は爆撃で崩れた家の壁で両側ともフェンダーがつぶれ、ライトは役にたたない。キーを入れ、エンジンが始動するのが不思議なくらいだった。

エウゲニアヴェニユを左へ折れ、シスメイルストリートに出る。一ブロックいった角に

あつたセムフッドのキャフェは爆撃に壊されすでに面影もなかった。

幅広い通りには全く人影がない。この辺りは英仏軍に完全占拠されている地域だが、彼らの姿もない。夜間のゲリラを怖れてだろうか。こうしてただ一人、夜間、車を駆っている皆川にも、英仏軍の兵士と同じ危険がないとは言えない。

彼が今向おうとしている仕事に、彼をおもむかしめた仲間たちからこの地域の市民兵に連絡は取られている筈ではあつたが、どんな手違いがあるかも知れぬ。

まして、市街を封鎖した英仏軍が彼を見咎めた時、どんな手を加えるかは全くわからなかった。検問なしの、即座の銃撃ということもあり得た。

後の窓から、手製の日の丸がたらしではある。しかしそれとても夜目に遠くから確かめられる筈はない。

周りにあるかも知れぬ眼から隠れるというよりは逆に、こわれて使えぬクラクションの代りに時折クラッチを切りエンジンを空にふかして鳴動させながら、皆川はゆっくり車を走らせつづけた。

車を乗り捨てるところまで一マイルにも満たぬ距離だが、速度を落した車のなかで、いつ浴びせられるかも知れぬ銃火を怖れつつ進む行程は、千倍の遅さにも感じられた。

レセップスの銅像のあったレセップス通りとの交叉点にかかった時、間近前方に銃声がし、眼の前の舗道に青い光をたてて銃弾が跳ねた。

停車した車に、

「誰か。どこへいくのか」

誰何する英兵の声が響いた。

闇をすかして見る眼に、数十米先のバリケードに動く人影が見える。

「家へ帰る。俺は外国人だ。通してくれ」

皆川は英語で叫び返した。

徐行し、彼らの眼前で停止した車を囲むように四五人の兵隊が立った。皆川の言った、外国人という言葉を私語し合う声が聞える。

「外国人とは何人か」

声が聞いた。

「日本人だ。窓の国旗を見てくれ」

皆川の名乗った国籍が意外だったか、周りでざわめく気配があった。

小さな明りが一瞬だけ彼の顔を照らし出して消えた。

「外交官か」

「違う。商社のカイロ駐在員だ。ポートサイドに入った貨物船に用事があって来ているうち、戦争になった」

説明に嘘はなかった。

「何で今頃」

とはいえ、夜ではあったが未だ十時前だ。陽が落ちてきて、ようやく夜の闇が地上を覆いつくした時刻だった。

「当地にいる友人が大怪我をし病院に入れられた。尤も、その男は病院に入った後、君らが病院に加えた攻撃で更に大怪我をしたそう。彼を見舞いにいって遅くなった。一時間前、彼は死んだがね」

誰かが何か言い、言われた人間が離れると間を置き他の誰かを連れて戻った。

士官らしい男が顔を覗かせた。男に向って皆川は、彼らに言ったと同じことを話した。「パスポートはあるか」

皆川がとり出して示したパスポートを受けとると、手元に隠した明りで確かめ、その灯を向け皆川の顔を照す。

士官が読み上げる名を、従兵の誰かが手元に記している。

「夜間の通行は禁じている筈だ」

「いや、我々外国人は何の通達も受けていない。何が何やらわからぬままだ。一体、これは正式の戦争なのか、それとも——」

「戦争だ」

遮るように言った。

「戦争としても我々には訳がわからない」

士官は何も答えず、代りに行く先を質した。

この道の先を右へ折れた埠頭の先近くにある業者のクラブの番地を答えた。

「トランクを開けろ」

兵士たちが開けられたトランクの中を捜す間、士官は彼の座席の辺りを明りで照し出した。

手にしたパスポートを返そうとしながら、士官はもう一度それを眺め直す。

彼らにすれば、近東とはいえこの町の戦場で思いがけず見かけた日本人の意味を判じかね、その扱いに戸惑うのがよくわかった。

「カイロにはいつ帰れるだろうか」

答える代りに士官はパスポートをさし出した。

「通れ。但し、今後夜間の通行は一切禁止だ」

皆川は頷いた。なお胡乱うらんげ気に見守る彼らの視線を感じながらギアを入れた。

「戦争はいつ終るのかね」

「知らんな。あの黒いうるさい蠅どもに訊いてくれ。一体いつ止めるつもりだと」
吐き出すように士官は言った。

“蠅か——”

彼は思った。思いながら彼の連想は何故かすぐに、このポートサイドに限らず、全エジプトの町中に張られた彼らの指導者の肖像を想い起させた。

写真だけではなく、実際に眼にしたナセルの姿が重なって眼に浮んだ。六尺を越す大柄な体軀。体だけではなく、彼の体の部分はすべて巨きく見えた。巨きな鼻、巨きな耳、張り出した顎、そして、半年前、来埃した社長を建設相との会談に案内した折、役所の廊下で若い建設相に紹介され握り合った彼の厚く巨きな掌。

その当時、そして今は更に、彼が革命後の国家の指導者としてかかえているものの大きさについて概略は知りながら、相手へのしかり包むようにして握手して来る彼の手に触れた時、皆川はこの男が並外れて巨きなその体の上にかかえている、並外れて大きなものについて初めて感じたような気がしたのだ。

侵略した英軍の将校が吐き出すように言った言葉を、車を駆りながら皆川は反芻^{げんすう}していた。

あの士官が、あの男と、自分がしたと同じように向い合った時も、彼は同じようにあの男のことを蠅と呼ぶだろうか、と思った。

しかし皆川がその手の巨きく熱い感触を知っているあの男を持ち出す前に、士官が吐いた言葉はあるところで当たっているとも言えた。皆川自身が、同じような感慨で彼らを眺めたことはなかったか。

ギザの巨大なモニュメントの周りで観光の客たちにまつわり群がる黒く卑小な人間たち、オールドカイロの下町の薄汚れたパジャマに似たガビラで巢食う下層の市民たち、それらを培う熱気と臭気の中に、彼らは確かに蠅とも見られた。

いや、四年前の無血革命後、市中で度々持たれるナセル始め閣僚たちの演説集会に群が

り熱狂し、市中を行進する市民たちを、皆川は時折、あの英軍の士官が吐いた言葉と同じような感慨で眺めたことがある。

それは、彼の事務所のあるスリマンパシャの、完備されたオフィス街や、美しく整った高級要人の住むザマリックやガーデン辺りの高級住宅地で感じるカイロ、エジプト、エジプト人たちとは全く違って、見守る眼にもっと生々しい何かをつきつけた。

そして彼らが、その蠅たちが、あのナセルが繰り返して言う、真実のエジプトであるに違いない。

士官の吐いた言葉は、この今になって皆川に忘れていたものを思い出させた。真実のエジプト、或いはエジプト人に対して自分が抱いた初めの感慨が、表現の形としては決して違っていかないのを彼は感じる。

危険な暗黒の市街をたった一人車を駆り、検問をようやく抜け、その先に更に危うい目的に向おうとしながら、皆川は今あの士官の言葉を契機に胸の内に蘇ったものと、今こうしてこの仕事に向いつつある自分との組み合わせを奇態な感慨で考え直していた。

彼らは確かに蠅であった。

この数日の戦闘に彼らは蠅のように容易に、蠅のようにきりなく殺されていった。そし

て、彼らは今なお、蠅のように執拗に闘いつづけていた。

その執拗さは侵略者の英仏軍の兵士にとって、あのスフィックスやピラミッドの足場で、旅客にまつわりついて駱駝をすすめ、スヴェニールを売りつけ、果ては、ただ金を無心するしつこきと同じものだったかも知れない。

そしてそのいずれもが、ナセルの言うが如くに、過去数百年の圧制と貧困から生れたものであるのかも――。

しかし、その詮索は、今皆川にとって一切不要ものに感じられた。

徐行する車のフロントグラスに額を押しつけ、折れて曲った街角から更に行く先を確かめながら、彼はそうしたことがらについて、今自分の内に、この数日以前の過去と比べて、決定的に異なる、何かが在ることを知っていた。

それはたった一つ、実に簡単なことがらによってもたらされたのだ。

皆川は彼自身、今、あの士官が言った、蠅であった。少くとも、彼を今、ここへ指し向けた仲間はそう言ったのだ。

果してそうであるかどうか、そのことは皆川にとってどうでもいいことに思われる。

彼にわかることは、突然スエズへの侵略が始ってこの数日、彼は彼らと一緒にいた、ということだけだ。そしてそのことが今この仕事を選ばせ彼をおもむかせたのだ。

彼はそれを今夜選んだのではない。すでに彼は選んでいた。

三日前、バーケットディグディの飛行場に英軍パラシュート部隊の最初の降下があった時、射ち殺された友人イスマイルの銃を彼が取り上げ空に向って放った瞬間から、彼は選んだ自分を覚っていたのだ。

スエズの侵略は、彼には関りない事件であった。皆川と同じ国籍を持つ人間たちの中には、たとえ今このスエズの地にいなくとも、彼らが抱いているある精神、ある観念からすれば、彼らはこの事件の内に敵を決め味方を決することが出来たろう。この事件について、侵略側の英仏が、或いはそれを防いでいるエジプトが、宣言した意味を認めることが出来たろう。

しかし少くとも皆川にとっては、この戦闘は、たとえそれが片側の謀略であり、侵略であろうとも、全く関りないことがらの筈だった。

一九五六年、十月二十九日、イスラエル軍がシナイ半島で国境を越え、その翌日、イスラエル空軍の爆撃が始ってからも、彼はカイロへ引き返し、或いは更に安全な外地へ、こ

の戦争をかわして逃れることが出来たのだ。

しかし彼はポートサイドへ踏みとどまった。それも決して、彼がその時、この事件に關しての自分を選んだからではない。スエズへの空襲が始ったその時も、彼はまだ傍觀者でしかなかった。彼は一刻も早くカイロへ、そしてそこが危険ならば外国へも移ろうと思っていた。

が、彼は一人の人間を説得しカイロへ連れ戻すためにその時機を遅らせたのだ。

そしてその人間、ポートサイドを故郷としこの町に家族を持つファリダは、彼の誘いに肯^{がえ}んずることがなかった。

皆川は侵攻がこれほどまでの戦鬪になるとは予想してはいなかった。それにしても当然起るだろう危険は充分予知していた。それでもなお彼が、とうとうポートサイドが封鎖されるまでこの地にとどまったのは、ただファリダのためでしかなかった。

彼を、この激しい戦鬪の危険の中に晒させたものは、結局、愛であったと言うのか。

危険の最中^{さなか}に、彼はその時になって初めて、自らのために愛という言葉を持ち出して考えた。多分、今までの彼の人生の中の初めての体験として。

そして自ら持ち出したその言葉に彼はまごついていた。